

平成23年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 カタクチイワシ

学名 *Engraulis japonicus*

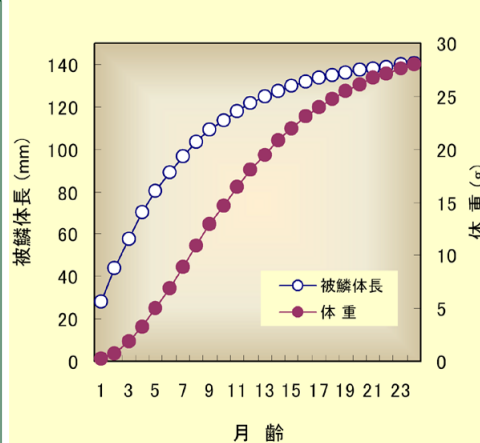
系群名 対馬暖流系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 3年
成熟開始年齢: 1歳
産卵期・産卵場: 厳冬期を除く周年にわたり産卵する
索餌期・索餌場: 分布域のほぼ全域
食性: カイアシ類を中心とした動物プランクトン
捕食者: 大型の魚類、海産ほ乳類、海鳥類など

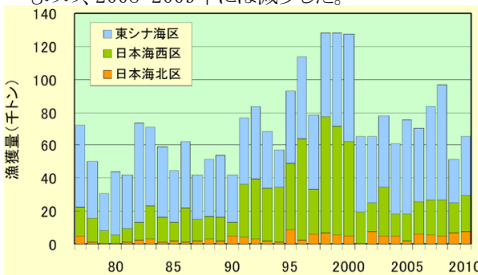


漁業の特徴

本資源は、日本海北区(石川県から新潟県)では主に定置網により漁獲され、日本海西区(山口県から福井県)では主に大中型まき網・中型まき網・定置網などにより漁獲されている。東シナ海区(福岡県から鹿児島県)では、主に中型まき網により漁獲される。なお、シラスは熊本県や鹿児島県の沿岸域で主に漁獲されている。

漁獲の動向

対馬暖流系群全体では1997年を除く1996～2000年に10万トンを超える漁獲量があったが、その後2004年にかけて6万トンに減少した。その後2008年まで増加したが、2009年には5.1万トンに減少し、2010年は6.5万トンであった。対馬暖流域の沿岸域におけるシラスの漁獲量は、2001・2002年に減少し、その後やや増加し、2007年にやや多かったものの、2008・2009年には減少した。

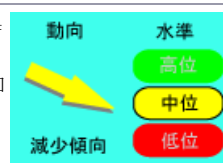


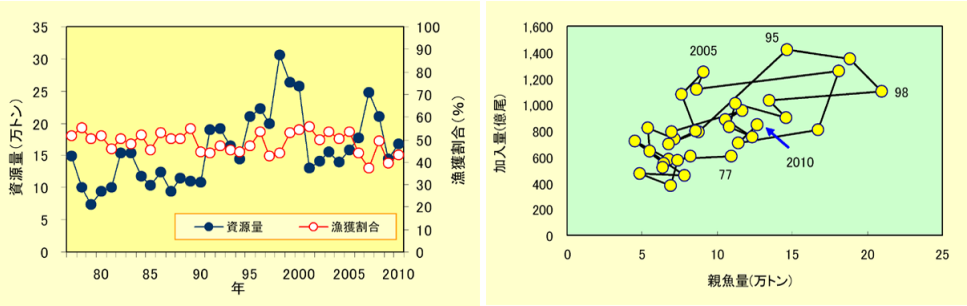
資源評価法

年別年齢別漁獲尾数に基づくコホート解析により、資源量を推定した。産卵調査、計量魚探調査および新規加入量調査(ニューストーンネット)などの結果を参考とした。

資源状態

1995～2000年に資源量は20万トン以上であったが、2001年に13万トンに減少した。2004年以降資源量は増加し、2007年には25万トンであった。その後漸減し、2008年に21万トン、2009年に15万トン、2010年は17万トンと推定された。直近5年間(2006～2010年)の資源量の推移から、動向は減少と判断した。また、漁獲の主体は0歳魚であり、親魚量と加入尾数には正の相関が認められた。2010年の親魚量は13万トンでBlimitを上回っており、資源量・親魚量などから総合的に判断して、資源水準は中位とした。





管理方策

再生産関係から、再生産成功率(RPS)と加入量の上位10%の交点をBlimitとした(親魚量9.1万トン)。現状の親魚量はBlimitを上回っている。2011年以降の加入量を過去10年間の中央値のRPSと仮定したときに、現状のFで資源は維持されると見込まれるため、Fの基準値はFt (=F2010)を採用した。

	2012年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	78千トン	F2010	1.27	43%
ABCtarget	69千トン	0.8F2010	1.02	38%

- Fは各年齢の平均
- ただしシラスの漁獲量を含む

資源評価のまとめ

- コホート解析により資源量を推定した
- 資源量は1990年代後半以降に変動を繰り返しており、近年では2007年に高い値を示した後、2008年および2009年は減少したが2010年は2009年とほぼ同じ水準であった
- 資源水準は中位で、動向は減少傾向

管理方策のまとめ

- 再生産成功率が過去10年間の中央値であれば、現状の漁獲圧で資源は維持される
- 資源を安定して利用するためには、親魚量の確保が有効

執筆者: 大下誠二・田中寛繁

資源評価は毎年更新されます。